雨乞い薬師

村民の思い

匠瑳探訪

―38―

龍尾寺の石灯籠

「日照り続きで雨が降ってくれるようにと7日間薬師さんに祈ったら、願いがかない6日間雨が降り続いたので村をあげて喜んだ」ことを記念して立てた石灯籠（いしどうろう）が大寺（豊和地区）龍尾寺にあります。

この寺の由緒や諸仏の功徳（くどく＝ご利益）をまとめた「縁起（えんぎ）書」は1657年（明暦3年）に書かれました。縁起書からは、729年（天平元年）に寺が開かれ、本尊薬師如来はインドからもたらされたとされています。さらに、752年に奈良・東大寺の大仏をつくった聖武（しょうむ）天皇のことも書かれ、龍尾寺が奈良時代に建てられたことが述べられています。

741年に匝瑳郡から奈良の朝廷に税として納められた記録が、郡名を示す最古のものとして正倉院に伝わっています。

また、房総では、7世紀後半の早い時期に古代寺院が建てられたことが、発掘された寺の瓦からわかっています。8世紀前半までに創建された可能性の高い寺は、現在までに20か所程が確認され、今の龍尾寺に関係すると見られる「八日市場大寺廃寺」も含まれています。

龍尾寺本尊の薬師如来像は、山門を入って右側の薬師堂にまつられています。市内で最大の像ですが、20数年前の調査の時には、堂の大きさとやや不釣り合いな印象を受けました。この薬師堂が建てられ、かつての本堂から移された可能性もあります。また、1680年代から椿新田の耕作も開始されたことで、薬師さんへの「雨乞（あまご）い祈願」も盛んになったのでしょう。

石灯籠が「惣村中（そうむらじゅう＝村民あげてのこと）」で寄進されたのは1809年（文化6年）6月でした。ちょうど200年前のことです。

2010年（来年）は、710年の奈良に都ができて1300年目にあたることから「平城遷都（へいじょうせんと）1300年」を記念して奈良県を中心に多くのイベントが計画され、報道されることでしょう。

そうした際に、この地域では大寺・龍尾寺などが建て始められたころと思いを巡らすと興味も増すことでしょう。龍尾寺参道入口には「関東三龍之寺」と案内板が掲げられ、境内に足を踏みいれると、由緒にふさわしい大寺の雰囲気が感じられます。

問 八日市場図書館☎73・3746